

《正岡子規(36)の続き》その264
子規周辺の人びと(十四)

平岸 三八

筆まかせ第一編(自明治十七年)中の「半生の喜悲」に、次のように書かれている。

「余は生れてよりうれしきことにあひ、思はずにここにこと笑みて、平気でゐられざりしこと三度あり。第一は在京の叔父のもとより、余に東京に來れといふ手紙來りし時、第二は常盤会の給費生になりし時、第三は予備門へ入学せし時なり。第一は数月前より遊思勃としてやまず、機會あらば夜ぬけなどせんと思ひし所なればなり。第二は出京已來食客にはひりこまんと方々の知らぬ人の処へいやながら行きしこと多く、それがため安心して學問出來ざりし其時に、此許しを得し故なり。第三はとても力足らぬ故、入学は出來ずと思ひぬし故なり。又生來最いやと思ひしこと、即ち覚え顔をしめしかめしこと二度あり。一は出京の際、始めて三津を出帆する時に、始めての旅といひ、つれはなし、実に心細く思ひたり。第二は予備門にて落第せし時に、これは予て覺悟ありたれども、生れて小学校に入りし已來始めての落第といひ、殊に親類の者などより叱られたればなり。」

ていることは、殆んど子規の「半生」ではなく、「一生」を活写したものと云つてもいいものではないか。これらのことがあつて、子規があるのだ。

数月來の熱望で、家出してまで決行しようとした上京の希望が達せられたことは、第一の喜びであつた。教育は田舎では駄目で、都会でと思つていたので、この時の喜は最大のものであつた。

上京しても學費はなし、書生(他家に身をおき、その家の仕事をてつだいながら勉強すること、學僕とも云う)や食客(ただおいてもらう、いさうらう)になろうとして、方々の知らぬ他人のところへ、いやいやながら(といつてもあくまで、余儀ない必要にかられてであるが)おめみえに顔を出すことが多く、そのため落付いて勉強ができなかつた時に、旧藩主久松家の家臣のうちの優秀な子弟に學費を給する常盤会の給費生に決定したときの喜、これで安心して學問ができることとなつた。給費額は、大學予備門(明治19年4月1日第一高等中学と改称)在学中は月7円、大學では10円で、その外に書籍代が必要に応じて給せられた。当時、東京に於ける一般下宿料は月4円であつたと柳原極堂の『友人子規』にあるから、此給費はあまり貧弱なものではない。

3月からである。久松家は12万石の中大名で、さまでの大藩ではない。それが常盤会寄宿舎(明治20年11月開設)を経営して、舎監を置き學生を收容した。「筆まかせ」(第一編によると、室数は12号室まであり、舎生は30名前後であつた。かなりの規模で、子規はここに明治21年9月から24年12月まで寄宿した。その写真は講談社刊の「子規全集」第九卷の巻頭にあり、二棟で、これをつなぐ通路と、別に食堂、賄所があつた。所在地は本郷区眞砂町18番地、敷地は103坪とある。

二代目舎監の内藤素行(俳号鳴雪)は、子規に感化されて俳句の道に進み、一流の俳人となつた。

少く余談にわたるが、旧藩主久松伯爵家が育英事業を起し、更に後には当主久松定謨がフランスに留學し、その後見人に加藤恒忠、秋山好古を派遣するなど、その費用はかなり巨額のものであつたと思われる。

華族としての体面を保つた上に、育英事業を営むというのは並々ならぬことと思われるが、その費用はどういうところから出たのであろう。

『鳴雪自叙伝』にも常盤会寄宿舎の舎監になつたことは触れられているし、久松家の財政について諮問員が置かれたことは書かれているが、育英事業その他の財源についてははっきりしたことは記述されていない。